

同級生

理事 松村 秀一



何かの巡り合わせだろうか。この原稿を書く前1週間中に4日も大学時代の同級生と行動を共にした。しかも、3つの異なる用事でだった。

最初は、建築学科時代の同級生。学生時代にはクラスで突出して設計の上手かった人だ。同級生の誰もが認めている。その彼は、大学院修士課程修了後大手建築設計事務所で数年務めた後、神戸の大学で教鞭をとるようになった。今回は彼が呼んでくれて、神戸の大学で特別講義をする機会を得た。

講堂型の大教室でたっぷり2時間ほど講義をした後、彼と二人、壇上の椅子に座り1時間ほど対論する設定になっていた。彼から様々な質問が飛んだ。学生時代から付き合いがなければ思い浮かばないような質問の数々だった。「なるほど、学生時代の私の行動は同級生からそのように見られていたのか」とか、「卒業後の関心事の変化を自分自身よりの確に言い当てているな」と思わせられる質問に、「こんな個人的なことに学生たちは興味があるだろうか」と心配になるほどではあった。

彼の発言は質問だけではなかった。建築に対する私の態度の甘さに関する厳しい指摘も交えられた。「そのことについて、松村君はどう考えているのか」という体の問い詰めだった。同級生なればこそその厳しさのある種の期待の入り混じった、とても個人的でリラックスした対話を十分に楽しませてもらった。少し的確さを欠いた表現だが、心洗われるような不思議な時間だった。もちろん、その後は三宮辺りに飲みに行き、より砕けた会話を楽しんだ。

さて、その翌日は京都で別の同級生3名と会った。こちらの3名もまた建築学科時代の同級生だが、私と同じように大学院の博士課程まで進学した研究者仲間でもある。建築の中での持ち場はそれぞれ、勤める大学も九州、大阪、東京とばらけてはいるが、同じ職業ということから同級生の中でも比較的よく会う友人たちだ。

今回は、このうちの一人が、京都の町屋や校舎を転用している最新事例のいくつかを案内してくれるという特別な機会だった。朝、日本でも最も古い歴史を持つ小学校の校舎だったものを転用した「京都市学校歴史博物館」(<http://kyo-gakurehaku.jp/>)に集合し、古い木造の研究施設を転用した「島津創業記念資料館」

(<http://www.shimadzu.co.jp/visionary/memorial-hall/>)や、京町屋のかつての状態をきちんと今日に伝える「紫織庵」(<http://www.shiorian.com/>)等を巡り、暗くなって酌み交わせる店で腰を下ろすまでの間、フルに野外活動を共にした。

同じ建築とは言え、それぞれ専門が違ふし、建築の見方も各人各様。もし同じ教育を受けた大学の同級生ではなく、専門家になってから出会った方だったら、自分とは異なる建

築の見方にそうそう聞き耳を立てることはないかもしれないが、そこはやはりある種の信頼関係にある同級生同士。異なる建築の見方に耳を澄まし、大きくうなずく。若い頃、どういふ建築を目指したり好んだりしていたかが凡そわかっている間柄だけに、かえって身に染みて教えられることが多いのだ。

お酒を交えて彼らとの建築談義を楽しんだ翌日は休日。朝から神奈川県南西部にある温泉地、湯河原へ向かった。今度は大学の教養学部時代の麻雀仲間たちとの宿泊付き同窓会だ。大学の周りの雀荘がほぼ絶滅しつつあるような今日の学生の方に「麻雀仲間」等と言うと、相当特殊な学生の集まりと誤解されそうだが、私たちが学生だった頃は、麻雀は多くの学生がたしなみの一つとしてやっていたものだし、大学の周りには雀荘が軒を連ねていた。ただ、私とこの仲間たちは、一般の学生よりは熱心に取組んでいた方なので、今でも定期的に同窓会をやっているという訳だ。

麻雀というゲームは、それぞれの人の性格が手に取るようにわかるところに一つの面白さがある。とりわけ社会に巣立っていない学生時代には、猫を被る必要もないので、それぞれの人間性が激しく表出していた。この同級生たちはお互いにそれを見て感じて知っているのである。今では企業で偉くなっている者もいれば、家業を継いだ者もいる。子供の教育で頭を抱えている者もいれば、親の介護に四苦八苦している者もいる。しかし、互いに人間性を深く理解しているだけに、卓を囲みながら、それぞれの事情や悩みもあけすけに語り合う。懐かしさも伴い、他には代えがたい時間が流れた。

翌日は台風だったが、何とか帰宅できた。そこに花が届けられていた。還暦の誕生日のお祝いらしく「おめでとう」のカードが添えられていた。差出人を見ると、これまた大学時代の同級生。「一同」となっている。どうやらいつも同窓会の幹事をやってくれている気の利く同級生の〇君が、誕生日のわかる同級生に還暦祝いの花を送ってくれているらしい。いつもの飲み会の会費で少し余っていたのを上手にやりくりしてのことだという。何とも嬉しいものである。

「親友」と呼べる少数の友人も大事だが、人生の豊かさにとって同級生は欠かせない存在だ。そのことを痛感した1週間だった。樫の芽会の奨学生の方々は、今まさに同級生との関係をつくる現役の時間を過ごしている。是非同級生との関係を大切にしたいものである。

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 教授